

作曲家・音楽プロデューサー

近谷 直之 君

【ちかたになおゆき】

2011年経済学部卒業。幼少期にピアノを始め、慶應義塾中等部ではマンドリンクラブに所属し、高等学校時代はバンド活動に没頭。高等学校・大学在学中はバンド活動以外にワグネル・ソサイエティー・オーケストラでピオラを演奏。慶應義塾創立150年祝典曲の作曲も手がけた。大学卒業後、CM音楽制作会社ミスターミュージックに所属し数々の大手企業のCMを担当。2013年には「三井のリハウス『みんなの声鉛筆』」でACC FESTIVAL テレビCM部門「ACCゴールド」を受賞した。2015年に独立後は会社を立ち上げ、テレビ番組音楽、映画音楽、ゲーム音楽、アーティストへの楽曲提供やプロデュースなど幅広い仕事に携わっている。主なプロデュース作にテレビドラマ「パリピ孔明」「東京タワー」等。

<https://lit.link/chikataninaoyuki>



「今年はこんな新しいことができた」と いつでも振り返ることができる自分でいたい

音楽が何よりの楽しみだった
少年〜青春時代を過ごす

——近谷さんと音楽との出会いはどのようなものだったのでしょうか。

近谷 それが物心付くか付かないかの時期でよく覚えていないのです。父の仕事の都合で1歳から3歳のときに米国ニューヨークで暮らしていました。ニューヨークと言えばジャズが生まれた音楽の都です。街中の至る所でストリートミュージシャンが演奏しており、親に聞くと私はそんなミュージシャンの演奏に合わせて楽しそうにピョンピョンと跳ね回りながら踊っていたそうです。その頃からピアノのレッスンも始めましたが、練習自体はあまり好きではありませんでした。ただ、うまく弾けると親や周囲の大人が喜んでくれるのがうれしかった。どちらかと言うと譜面通りに正しく弾くより、自分で適当にメロディーやリズムを工夫しながら即興演奏するのが楽しかったですね。もしかしたらそのとき感じた「楽しさ」が作曲をするようになったきっかけかもしれません。

日本に帰国して入学した小学校の卒業アルバムを見ると「作曲家になりたい」と書いてあります。でもまだ当時はぼん

やりとした夢でしかありませんでした。

——慶應義塾高等学校時代は学生音楽団体のワグネル・ソサイエティー・オーケストラ（以下、ワグネル）に参加しながらバンド活動にも熱中していたとか。

近谷 はい。私はバンドではギター担当で、慶應義塾の自由な雰囲気にも助けられ、どちらかと言えば勉強よりワグネルやバンド活動の方に力を入れていました。

当時のバンド仲間とは現在に至るまで親しく付き合っています。彼らは今は公認会計士、プロドラマー、会社を継いでいる者、私と同じく作曲家など、それぞれの道で頑張っています。例えば一瞬で中高生時代に返ることができません。バンド活動をしていた時間はまさに青春でした。

ちなみにベースだった宮本基央君（現・東都観光企業株式会社代表取締役）から2021年に東都自動車グループのCM音楽の依頼を受けて一緒に仕事ができることはとてもうれしい経験でした。

——大学では経済学部で学ばれ、ワグネルで引き続きピオラパートを担当されました。

近谷 音大受験もちょっと考えたのですが、音楽だけではなく、それを取り巻くビジネスや社会についても考えてみたかったので最終的には経済学部を選択した

のです。山田太門教授（当時）の研究室で文化経済学の視点から音楽などのイベントがもたらす経済効果について研究しました。あまり意識しませんでした。音楽を仕事に選んだ今、ビジネスや社会と音楽とのつながりについて真剣に考えたことは得がたい経験になっていると思います。

とは言え、バンドも続けつつ、ワグネルでピオラを弾いていたりしましたから、中高時代と同じく音楽漬けの生活だったことは変わりません。ワグネルの仲間には現在気鋭の指揮者として活躍する坂入健司郎君がいました。彼とは経済学部の同級生でもあります。

音楽を仕事にするためにはどうすればいいのだろうか？

——大学時代からは作曲にも本格的に取り組まれています。

近谷 大学生になってパソコンとDTM（デスクトップミュージック）のソフトがあれば曲作りも演奏も一人でできることを知って、音楽を仕事にする夢がいつそう膨らみました。2〜3年生の頃からプロの作曲家のお手伝いをしたり、慶應義塾創立150年記念演奏会のために祝典オーケストラ曲「150の継承」を作



音楽に没頭した学生時代（一番右が近谷さん）

曲し、4年生のときには『塾』に取り上げていただいたことも良い思い出です。当時の誌面に在学生の作曲家として笑顔

の私の写真が掲載されていますが、「お前、これが大変なんだぞ！」と自分にとってやりたいですね（笑）。

——実際に音楽を仕事にするために相当の紆余曲折があったのですね。

近谷 はい。仲間たちがそれぞれ進路に向かって頑張っている中で、私はどうすれば作曲家になれるのかすら、全くわかっていなかったのですから。結局、大学を卒業してから半年以上は完全なニート生活でした。その間はコンビニでバイトをしていましたが、同級生が初任給で親にプレゼントをしてあげたなどと、飲み会で盛り上がりつつある話を聞くと気分が落ち込みました。10年間、慶應義塾で学んだ自分が将来も見えずに暮らしていることが情けなく恥ずかしく、この期間はさすがに学生時代の友人たちとも距離を置いてしまっていました。ただしその間

も悶々とした気持ちを抱えながら作曲だけは続けていました。CM音楽制作で業界ナンバーワンだった企業一社だけに絞って自作曲のデモテープを送り続け、ひたすら返事を待ち続けたのです。今から考えると無謀なのですが、父が「目指すならその業界ナンバーワンの企業にしかない」と言った言葉が頭にありました。その結果、卒業後半年余りを経てようやくその会社に入ることができたのです。

——ものすごい執念で「作曲家」への道を切り開いたのですね。

近谷 いや、ただ運が良かっただけで決して人にはお勧めできないやり方です（苦笑）。入社すぐの頃は雑用係であまり仕事がない状態でしたが、社内で触れる著名作曲家の膨大な作品データや資料から学んで、自分なりにいろいろなタイプの曲を作って社内プレゼンしてチャンスをつかもうと必死でした。入社後1年ぐらいすると仕事を任せられるようになり、それからは年間200〜300の楽曲制作に関わりました。確かに目の回る忙しさでしたけど、それだけの数をこなしたおかげでわかったこともたくさんあります。CMのターゲットや商品特性に合わせて曲を生み出すHOW TOみたいなものも身に付きました。そんな生活を4

年も続けた頃でしょうか、次のステップを考え始めました。CM音楽の仕事は今でも大好きですが、より幅広く作曲家として羽ばたきたいと考えるようになったのです。そして2015年、27歳のときにフリーランスの作曲家として一歩を踏み出しました。

——独立してからのお仕事は順調でしたか。

近谷 はい、特に営業活動のようなことはしないまま、会社の先輩やそれまでお仕事をした方々からたくさんのお仕事をいただくことができました。仕事の種類もテレビ番組の音楽や映画音楽などこれまでより広がり、PUFFYやBONNIE PINKなど著名アーティストへの曲提供やプロデュースなども手がけました。独立して良かったと心から思える日々を過ごしていました。ところが、そこにコロナ禍がやって来ました。CMやイベントがらみの仕事は軒並み中止となり激減。一時はかなりの窮地に陥ったのですが、2021年後半頃よりテレビの仕事を中心になんとか盛り返してきました。テレビ朝日ではワグネルの後輩がプロデューサーとして活躍していて、彼を通じて仕事の話が来ることもあり、感謝しかありません。

最近ですと、フジテレビ系『パリピ孔

明』、テレビ朝日系『東京タワー』、テレビ東京系『錦糸町パラダイス〜渋谷から一本〜』の音楽を担当しています。『パリピ孔明』では、なんと主人公の父親役として出演するという貴重な経験もできました。現在手がけている『錦糸町パラダイス』では実際に錦糸町を歩いて感じた「無国籍感」を作曲に生かし、民族音楽やロック、サイケなど多彩な曲を作ってみました。視聴者の皆さんがどのように感じておられるのか楽しみです。

ドラマの仕事は面白いですね。私の場合、事前に渡された脚本を読み、自分の頭の中で俳優が演じるシーンを妄想しながら楽曲イメージを創り上げます。作っている最中は自分でセリフをブツブツ言いながら作業していますので、とても人には見せられない姿だと思います（笑）。

今、あらためて実感する 人生は「Connecting the dots」

——今後やりたいと考えていること、作曲家、音楽家としての抱負をお聞かせください。

近谷 やはり老若男女多くの人が視聴するNHKの大河ドラマや朝ドラの仕事は手がけてみたいですね。もし私が担当することになったら、これらの番組が大好

きな祖母が大喜びしてくれると思います。ただ私は「〇〇の仕事をやりたい」というより、毎年「今年はこんな新しいことができた」と振り返ることができるよう生きていきたいと思っています。学生時代はまさか自分がテレビの音楽番組でCM音楽制作について語ったり、ももいろクローバーZの玉井詩織さんのソロコンサートでキーボード奏者として演奏することになるなど想像もできませんでした。東京国際フォーラムで開催された玉井さんのコンサートは私にとっての演奏者デビューでもありました。先ほどお話しした『パリピ孔明』でのなんちゃって俳優デビューもそうですが、日々さまざまな音楽の仕事をこなしながら、どのような変化球が来ても、全力で楽しむことができるマインドは常に持っていたいですね。未経験へのチャレンジから得られる刺激や緊張感が自分の新しい可能性を開く鍵になっていると思うからです。

私はアップル社を創設した故ステイブ・ジョブズの人生は「Connecting the dots」という言葉に心から共感しています。この言葉の大意は過去の一つ一つの経験（dot）が、時を経てつなぎ合わされると思いもよらなかった人生の「絵」ができるということ。一つ一つの



「点」の時点では、果たしてどういう絵になるかはなかなか想像がつかないものですが、音楽を仕事とすべく紆余曲折を経てきた今の自分には、「点と点を結ぶこと」が、線は生まれません。絵を描くことができず」と痛感しています。

今、こうして「塾員山脈」のインタビューを受けていることも、これからの自分の人生の中の大事な「点」になるのかなと思っています。これを読んでいる塾員の皆さま、御社のCMも、ドラマや映画のための楽曲制作などもフルスイングで取り組ませていただきますので、ぜひお気軽にご連絡ください（笑）。もちろん

ん変化球も大歓迎です！

——最後に塾生へのメッセージをお願いします。

近谷 私の人生はかなり「運」の要素が強く、あまり後輩たちには参考にならないと思うのですが、その中でも自分なりにジョブズが言う「点」を増やす努力は続けてきたのかなと思っています。それは何より私が心から音楽が好きだからでしょう。本心にさまざまなことがあった人生ですが、好きなことを仕事にできることは何よりも幸せだと思います。

もし音楽業界に興味があるけれど、具体的にどうすればいいのかわからない、という迷える塾生の方がいらっしゃったなら、お気軽にご相談ください。自分自身がこれまで慶應義塾の先輩や仲間たちに助けてもらったように、今度は自分がその役割を果たす番だと思っていますので、塾生の皆さんなら大歓迎です。

もちろん仕事だけが人生ではありません。特にこれから無限大の可能性が広がっている塾生の皆さんは大学での学問はもちろん、おそらく一生の付き合いになる友人との交遊、そして恋愛も思いっきり謳歌してほしいと思います。

——本日はありがとうございました。